ふるさと館へ　竹田さんと玉井さんに会う

竹田覚さんが当時館長をつとめていた『北條市立ふるさと館』（当時）は、正岡邑のある「八反地」を南下してすぐの「別府」に所在していた。クルマで５分とかからない至近距離にあった。

■得居さんが絶賛した「河野三島宮炎上」の筆者

北條市の地形は、わが故郷の八幡とよく似ている。西側に海が広がり、町は帯状に南北に伸びていて、背中に山塊を背負う形となる。斎灘と玄海灘、高縄山（九八六㍍）と皿倉（六一三㍍）・帆柱（四八七㍍）の山塊。三〇〇㍍以上も高縄山の方が高かったとはあとになって知ったことだが、山の姿が似ているのには驚かされた。北九州に移住してからの重吉・クラ夫妻もきっと同じ想いに駆られて、風早への望郷心に揺さぶられたことも度々だったに違いない。それくらいの感性とこころの余裕はもっていただろう。孫の一人として、そう願いたい。

かつては一面の田園地帯か、あるいは巨大な施設の跡地だったに違いない。ともかく、ゆったりと整地された一角に、「北條市文化の森公園」が広がっていた。文化施設、福祉施設、スポーツ施設が一まとめに配置されていて、なかでも一際、前衛的なデザインの三階建ての建物が、朝の光を真横に受けて、銀色の壁面を光らせながら、ぼくを招いていた。「ふるさと館」がそれだった。左隣が「市立図書館」、さらに左隣の「社会福祉センター」に玉井利明さんの勤務する「福祉協議会」があるという。まず、「社会福祉センター」へ。

当時は北条市立ふるさと館と呼ばれた

まるで飛鳥の里かと錯覚する庄部落

玉井利明さんについて、すこし触れておきたい。得居衛、長野光雄、玉井利明の三氏は『風早』の常連執筆者の中で、とくに「正岡氏」について考察を深めてくれた大事な人たちである。が、得居さんはすでに亡い。長野さんも今治市在住で壮健でいられるようだが、高齢のため、聴力が不自由。電話でのやり取りに難があ

った。直接に伺うしかない。この旅のなかで今治まで足を伸ばす時間がひねり出せるといいが。だから、せめて北條在住の玉井さんにはだけは会っておきたかった。得居さんが絶賛した『河野三島宮（現・高縄神社）炎上』は、ぼくがあれほど逢いたがっていた「風早牢人の首魁・正岡式部亟重氏」の最期の模様を、近世文書「河野三島宮縁起」と「伊予国風早郡河野三島宮来由記」を援用しながら、一つの絵巻物に仕上げてくれていた。強風にあおられて夜空を焦がす紅蓮の炎が、今にも読み手に襲いかかるような、緊迫感に満ちた描写で、不思議な魅力があった。『沙婆山』『河野の聖母』そして『わが家の墓碑銘にみる夫婦別姓』と毎号、精力的な執筆活動をしていたものを、平成三年四月刊の第二一号『河野家伝説の易理展開』を最後に「風早」の誌面からふっと姿を消してしまったのはなぜか。空白の一二年の意味するものは何か。玉井さんに直接、それを問うてみたかった。

玉井さんは、その頃、高縄神社の禰宜であった。それでいながら、市の職員として勤務しているらしかった。今の時代、神主専業はありえないのか。

■時間ができた　庄の仏像群に逢いにゆく

受け付けで来意を告げると、玉井さんはすぐに現れた。柔らかい声音が印象的だった。

「十一時からの竹田館長の時間に一緒させてください。上の方にもそれで了解をとりましたので」

庄の木造薬師如来座像と仏像群　兵火で焼け爛れたものだが不思議な生命力が！

なるほど。こちらの面会目的は一つだから、そういう段取りを先方から用意してくれるのなら、願ってもない成り行きである。一時間ちょっと、時間に余裕ができた。さっそく木造菩薩立像のある庄部落に行ってみるとするか。風早誌は、創刊以来二〇余年、その表紙はずっと「木造菩薩立像」で押し通している。だれのアイディアなのか、あとで訊いてみたいが、ともあれ、風早のシンボル、といっていいはずだ。

再び、八反地にもどり、篠原酒造で「桜うづまき」を購った。北條の地酒を西明神正岡家の五輪塔にご馳走してあげよう、と思

収蔵庫に仕舞われていてお目にかかれなかった菩薩立像

いついたからだった。ついでに一本五〇〇〇円の「大吟醸」を二本、わが家宛、配送して貰うこととした。

立岩川を渡ると、下難波の庄部落は直ぐだった。が、お目当ての木造菩薩立像は薬師堂の収蔵庫の中に仕舞われたままで、会えなかったが、堂内に安置された「仏像群」からは幾多の兵火に見舞われてもなお、生き残っている悦びが伝わってくる、不思議な魅力がたちのぼっていた。爛れて崩れ落ちたお顔が、むしろ神々しかった。

午前十時四〇分、早めに「ふるさと館」へ。館長室へ通される。目を通していた書類から顔を上げ「やあ、お待ちしていました」と椅子から立ち上がった部屋の主。初対面なのに、旧知のような親しさが通っていた。「風早」の発刊母体である「風早歴史文化研究会」は、市の教育委員会から、「ふるさと館」開館と同時にこちらへ移管され、竹田館長が実質的に切り回している。「風早訪問」に先立って、何度か電話で竹田館長とは対話していた。その上で、「風早」誌をなぜぼくが注目するに至ったか、を理解していただく早道として「汝、風早へ……」をお届けしておいた。

「拝読しました。短時間で、よくここまでいらっしゃいましたね」

必要なことがあれば、何なりとどうぞ。のっけから、ふんわりと、こちらをつつんでしまう、このひとのぬくもりは、この後も変わることがない。だから、だろう。半年置きに定期的に「風早訪問」を心がけるようになった今も、まずはここを訪れてから、という習慣が身についてしまった。

得居衛さんの蔵書・蒐集史資料は未整理のままだが、いずれ「得居文庫」として閲覧できるようにしたい、という嬉しい「館長の抱負」をうかがっているところへ、玉井利明さんが合流。名刺代わり、と笑いながら『題名のない問答集　玉井掃部』と表書きした小冊子を持参してくれていた。それぞれの心配りのきいた時間。あっという間に正午となった。夜、一緒に食事をする約束だったから、それまでにこなしておきたいこともあって、昼食も誘わずに「ふるさと館」を辞した。

河原二一七番地・渡部家はいまだ応答なし

心がざわついていた。前日に「除籍原簿」を取得して以来、折を見ては、河原の「渡部隆男」家に電話を入れているのに、応答がない。すぐにでも消息の読めるはずだった祖母方からして、こうである。祖父・重吉の「田中家」にいたっては、「菊夫」という戸主の存在が判っているだけであった。風早2日目。そんなに時間の余裕があるわけじゃない。ともかく、「河原」をこの目で確かめることとする。

■亡父の話の中の屋敷と蜜柑畑がそのままに……

高縄山系を水源とする粟井川と松山・今治を結ぶ一九六号線がまじわる地点に、蓮福寺という真言宗豊山派の大きな寺院があった。クンと海の馨りがする。斎灘(いっきなだ)は目と鼻の先だ。ひとまずクルマを寺院脇の適当な空き地に駐め、街道を横切る。人家は街道に沿って南北にのびている。六月の昼下がり。このあたりの紫陽花は、まだ盛りにはほど遠く、お付合い程度に、いやいや花びらを綻ばせていた。

眠ったような、人気のない部落に入る。

部落の真中にある、河原二一七番地の「渡部隆男」家はすぐに判った。なんという構えの大きさだろう。父の話どおりの伊予柑畑も、敷地の中にあるではないか。けっして新しい造りの屋敷ではない。明治末期か大正になってからのものに違いない。屋根瓦と木柱との調和が、格調の高さを強調している。だが、恐ろしく活気のない、どこか投げ遣りな空気が、すっぽり、この屋敷を包んでいた。思いきって、玄関の呼び鈴を捺す。家の中から、犬が吠えているのに、何の応答もない。無人というのでもなさそうだ。もう一度、呼び鈴を捺す。再び、犬が吠えるだけだ。

以前はこの屋敷の外側にもう一つ門があったという

右が父の話に登場した蜜柑畑

諦めた。不吉な想いが頭をもたげる。夜、改めて来てみよう。明かりがついていれば、だれかがいるわけだから、とおのれに言い聞かせた。敷地の中をぐるりと迂回して、そのまま裏へまわれ

た。けっして「渡部家」に拒まれたわけではなかった。がっかりしたわけではない。むしろ、だれかがぼくの訪れるのを知っていて、わざと焦らしている。そんな温か味のある一つの意思さえ感じ取っていた。

■土に還る。血族の眠る海辺の墓域にて

「誘われるようにして」と、いう台詞を、この『父祖の地を訪ねる旅』で、これから何度、口にしてしまうのだろうか。

そうとしかいいようのない出来事だった。渡部家の裏口から、見えない糸に導かれるようにして、集落の中を横切り、まっすぐに海に向かって街道を渡り、いつの間にか、わたしは「渡部家之墓」の前に立っていた。三つ星に一文字。古代から中世にかけて海に生きてきた部族の紋章「渡辺星」の家紋が、その墓標に刻まれている。もしかして！

寶巒院義釜長壽居士
良樹院浅室貞壽大姉

戒名を、やっと、こう読み取ったものの、仏門独得の「漢字」だから、読み違えているかもしれない。側面にまわって俗名を読む。ある種の期待をこめて。

渡部長五郎

これが部族の紋章「渡邊星」　父の望郷の念が後押ししてここへ誘われたのか

紛れもなく、わが曾祖父（天保十一年・一八四〇生まれ）である。没年は書かれてない。（註・大正九年二月没、享年八〇）そのシンプルさが、曾祖父・長五郎の威厳を感じさせる。思わず、合掌する。風早の郷に来て、初めて先祖の眠る奥津城に足を踏み入れたわけである。

亡父の望郷の念が後押ししている。その時、気づいた。残念ながら、菩提寺がどこだか、宗派が何だか知る由もない。が、こうして、「渡部家」の墓所に、まずご挨拶できたのは、理屈では計り知れない、そうした力がはたらいているに違いなかった。ついでながら、曾祖母の名は「コマ」。弘化三年（一八四六）生まれ

祖母の父・渡部長五郎墓

その長男・岩太郎墓

で、八反地村門田喜八家から嫁いできた。明治五年以前のことだから、入籍の年月日は記録されていない。大正十一年、夫・長五郎が逝って二年後、七六歳で亡くなっている。

曾祖父母の墓標の右隣に、相続した長男・岩太郎夫妻のものが寄り添っていた。こちらは少々、装飾過剰ではなかろうか。時代の余裕のなせるわざか。まず、墓石の丈が、長五郎さんより五〇チセンは高い。多分、下支えに起用した蓮台がそうさせたのだろう。

紹光院恭岩春洞居士

その先代・勝次と浅次の墓　少なくとも２００～３００年前に土に還った血族たち

定光院恭心沙相大姉

岩太郎さんは、祖母・クラの二歳下の弟であった。明治七年（一八七四）生まれで、昭和七年（一九三二）、五八歳で亡くなっている。妻、セイ。明治十三年（一八八〇）生まれ。明治三二年二月、河野村別府一一六番地・久保田嘉太郎家から嫁入り、とある。昭和二六年（一九五一）一月没、七一歳。

さらに、右隣に目を移す。墓石の質が、突然、変わった。硬質なことで名が通っている安山岩から、ざらっとした手触りの凝灰

石に。焼き物でいえば、備前焼と信楽焼ほどの印象と質の違いがある。造りも小ぶりになった。

渡部勝治　明治廿三年庚寅旧十一月廿日

前日に取得した「除籍原本」で初めて知った、高祖父の名である。戸籍名は「勝次」。文化一三年（一八一六）一二月二七日生れで、「亡祖父浅次長男」とある。新暦では「明治二四年一月二九日」に亡くなった、とある。享年七五。妻、ミナ。「明治五年以前當郡當村田中惣蔵亡次女」というから、同じ里人との結びつきだった。明治二二年巳丑旧六月五日に七〇歳で先立った、と二人の墓が教えてくれる。「當郡當村」を当時の標記で再現すると「風早郡河原村五番戸」である。

桂林壽榮居士
寶林妙榮大姉

この勝治夫妻の先代は「浅治・まん」のカップルである。やはり戸籍名は「浅次」。生年は定かでない。わずかに「墓碑」に刻まれた没年が、彼らの生きてきた証しを伝えるに過ぎない。慶応元年（一八六五）乙丑九月一九日と嘉永五年（一八五二）。明治維新前夜に、その一生を終えている。

照瑞本光居士
照眞如法大姉

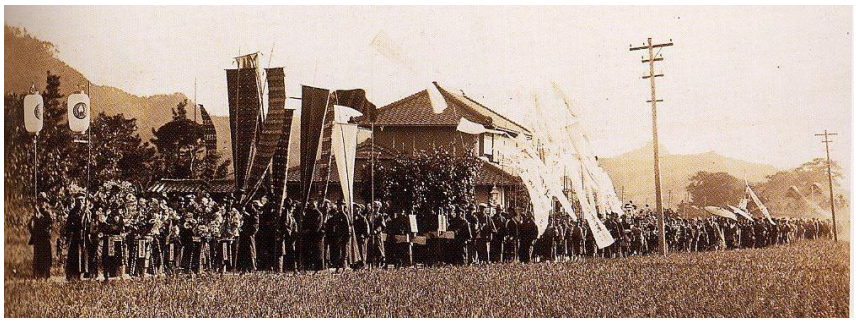
血族たちが土に還って眠りつづける鎮魂の霊域が、こんなにも心を安らげてくれるものとは知らなかった。海からのしっとりとした風が、快く頬を撫でる。

浅治夫妻のもう一つ右隣のものは、全く判読できないほど墓石の表面が風化していて、わずかに「天明四年辰」（一七八四）の五文字を判読するのがやっとだった。約二二〇年前か。もっと古いのもあるのではないだろうか。二〇体ばかりの墓標が、まるでお互いを暖め合うようにして、一まとめにされている。なかには、どこかが欠けてしまったのもある。「寛延四年(一七五一)」か。これはかなり古い。五〇歳で亡くなったとして、少なくとも三〇〇年前に、この粟井の里に生れ、土に還っていった血族と、いま対面しているわけか。

海を背にして、墓域は鳥が翼を広げた形で横長になっていた。「渡部家」がその左翼を占め、真ん中の胴体部分に地蔵堂と赤い帽子をかぶった六体のお地蔵さんがおさまっていて、年輪を経た巨木が枝を広げながら、お堂をかばっている。柿の木かな。似ているが違う。

【後註　ふるさと館・竹田覚氏によれば「地元では、チシャの木、

あるいは柿の木だましと呼んどります。柳原の庄屋屋敷に樹齢四〇〇年くらいのがあったんですが伐ってしまいました」と。今では河野小学校の校庭と鹿島に残っているそうだが、河原にあるとは知らなかった、とおどろいていた】



太平洋戦争でルソン島に逝った桂の墓。墓と言うよりは薄幸の二八歳の鎮魂碑である

ふと、気づいた。渡部家の墓前には、新しい香華や供物が見当たらないのに、荒廃した感じはない。なぜだろう。と、左端から、一際、背の高い墓標がこちらを手招きしているではないか。

陸軍上等兵　渡部桂之墓

昭和一七年、フィリッピンで戦死した当主の鎮魂碑だった。大正三年九月生れ。この薄幸の二八歳の人生とは、どんなものだったろう。哀悼の想いが不意につきあげてきた。その場でしばらく両手を合わせる。ふと、思い当たった。「風早」から聴こえていた合唱(コーラス)の声の主の一人が、このひとだった、と。やがて、その理由は判明するのだが、それには、あと二日の時間が要る。

【上の写真】

太平洋戦争で散華した兵士を各村々は合同葬で迎えた（昭和17粟井村＝渡部桂上等兵もその一人）　北条市合併記念誌より